

宇輝人

vol.52

人と人とのつながりが幸せを生み
連なるランが幸せをつないでいく



五蘭塾

1985(昭和60)年、若い農家たちが集い、三角町の戸馳島に一つの塾が生まれた。「5年先の蘭を見据えて学び合っていこう」との思いから「五蘭塾」と名付けられて35年、今では日本一の洋ラン出荷グループにまで成長した。

先代の塾長で(有)天川花園の代表、嶋田薫さん(52)は「平成4年に24歳で父と共に天川花園を始めました。五蘭塾があったから、資材の調達や蘭の販売先などが確立されていく、無事に事業を立ち上げる事ができました。」と話す。

父と共にランの道へ

生まれも育ちも三角町戸馳島。

主力商品の「鳳凰」



「高校生の時につくば博が開かれ、日本中がバイオブームに。それで、農業も面白そうだなと思っただけです。」佐賀大学農学部に進学し「野菜花卉園芸を学ぶと、遺伝分析に熱中した。」

ランの道を選んだのは父がきっかけ。父は米やミカンを作り、直接洋ランとは関わっていませんでしたが、五蘭塾の立ち上げに携わっていた。「本当はランをやってみたくはなかったんですけど、そんな父の姿を見ているうちに、私もやってみようと思った。」

大学卒業後、県の先進地農家留学制度を利用し、愛知県のラン農家に2年半。ラン独特のフラスコ苗の育て方など、栽培の基本はここで教わった。

人とのつながり

昨年、元号が令和になるのを機に父から代表を引き継いだ。夫の正稔さん(59)は「本当に仕事が好きだと思えますね。特に花を作ることは大好きで、どんなに忙しくてもストレスを感じないって言っていますから。会社だけでなく県の役員なども務め、頑張っ

います。」と話す。経営者となり、花作り以外にも会社や従業員の事など、考えることは多い。

「熊本地震では幸い大きな被害は出ませんでした。道路が通れなくなっているけど、運送業者さんが頑張ってくれておかげです。でも、今回のコロナの影響は大きいですね。」

3月4月は祝いの機会が多い。大輪の胡蝶ランを育てる天川花園にとって、最もランの需要があるシーズンをコロナが直撃した。

「本当なら年間が一番稼がない時期だったので頭が痛い。全国の仲間とも情報交換しながら支援制度を活用しています。」

「雇用は確保しながら、働き方改革も進めていきます。働き手が息切れしては続きませんから。でも花の質は維持しないと。今まで培ってきたお客さまからの信頼、期待は裏切れません。」

今期の五蘭塾の塾長を務める藤永篤史さん(42)は「塾員は仲間でもあるけれどライバルでもある関係。紅一点の天川花園さんのラン

はどんどん良くなっています。これからお互いに切磋琢磨していきたくですね。」と語る。

幸せはチョウウとなって

花の姿が、まるでチョウウが舞っているかのように見えることから名づけられた胡蝶ラン。花言葉は「幸せが飛んでくる」。

戸馳島もまた、チョウウの羽の形をしている。五蘭塾の立ち上げから35年。島の農家が生み出す幸せは、美しいチョウウとなって日本人々のもとに飛び立っていく。

嶋田 薫 Shimada Kaoru

昭和42年生まれ
三角町戸馳出身 二男一女の母
(有)天川花園代表取締役
平成4年に天川花園を創業
平成11年、結婚を機に法人化し令和元年から代表取締役を務める 昨年まで五蘭塾の塾長を1期2年務めた

